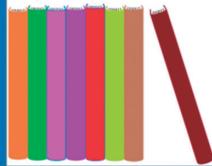




# 大人が絵本を 第26回 時代を超える



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子\*  
小児歯科医師 濱野 良彦\*\*

\* 絵本と図鑑の親子ライブラリー Bibliオキッズ(福岡市)  
\*\* 医療法人元気が湧く 理事フアウンダー

## 🐧 世代の架け橋

ぼくらの なまえは ぐりとぐら  
このよで いちばん すきなのは  
おりょうりすること たべること  
ぐり ぐら ぐり ぐら<sup>1)</sup>

世代を超えて愛され続ける双子の野ねずみ「ぐりとぐら」と聞いただけで、その愛くるしいキャラクターがまぶたに浮かぶ方は多いでしょう。「待合室にいるよ」と言われる医院も多数あると思います。この「ぐりとぐら」が生まれたのは1963年のことですので、2013年に50歳のお誕生日を迎えた絵本ということになります。親子2世代だけでなく、今や3世代にわたり共通して楽しまれている絵本です。

子どもの頃にお気に入りだった絵本は、大人になっても記憶に残っているものです。そして、自分が親になったとき、そういった思い出のある絵本を我が子と一緒に読みたいと思うものです。それはやはり、物語世界が親子の懸け橋となって、コミュニケーションを高め、絆を深めて家族の文化ともなって受け継がれていけるからです。

「子どもの時に読んだ絵本で、パンを作っていると部屋の中にどんどん広がってパンだらけになる話があったのですが、何の本かわかりますか」というような、絵本のタイトルは覚えていないけれど内容を覚えていて、印象に残っている箇所を説明して絵本名を尋ねられるお父様お母様がいます。登場人物の特徴や物語の山場だけを覚えていて、その絵本にもう一度、出会いたいと希望されるのです。絵本の力はやはり底知れないと思います。20年、30年と触れていない絵本でも、その物語世界をたっぷり堪能して大きくなった大人は、ちゃんと記憶の片隅に棲



1981年 月刊「こどものとも」



『マフィンおばさんのぱんや』竹林亜紀 作 河本祥子 絵(福音館書店)

みついているのですから。そして自分が親となってわが子と触れ合っているふとしたときに物語シーンがよみがえり、自分の楽しんだ世界へ子どもを招待しようとするのですから。

こうして考えると、絵本は他の書籍とは異なる読まれ方や愛され方をしているのではないのでしょうか。子どもが読み、きょうだいで共有し、そして次の世代、その次の世代へと読み継がれる作品が多くあります。もちろん、小説にも古典となって読み継がれるものはありますが、家族の文化となって何世代にもわたって読み継がれる古典小説となると、絵本とは比べ物にならないでしょう。絵本が価値ある文化財と呼べるところです。

質問のあった絵本は『マフィンおばさんのぱんや』で、初出は1981年の月刊絵本「こどものとも」から刊行され、それが1996年に「こどものとも傑作集」でハードカバーとなって発行されました。15年の時を経て発行された絵本の表紙は、時代を映す鏡のようにパン屋の看板がルーフシェードタイプに生まれ変わっています。



## 色あせない100年前の絵本

このように長年にわたって売れ続け、読まれ続け

# 手にするときは！

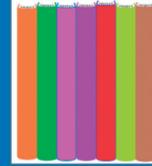
## 絵本～古典絵本～



企画 濱野 良彦

構成 木須 信生 ※※※

※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)



ている絵本群を「古典絵本」といいます。古典絵本の代表的なものとして取り上げられるのは、キャラクターだけでも人気の高い「ピーターラビット」で、『ピーターラビットのおはなし』は100年を超えて世界中で愛され続けているイギリス絵本の古典です。出版されるすべての絵本が古典となるわけではありません。古典絵本になるには、それだけの要素が必要で、選び抜かれた言葉と絵の力、そして子どもも大人も惹きつける物語性を備えていなければなりません。

このピーターラビットについて、瀬田貞二氏は「物語と絵と、本の形が三位一体になった絵本」と称し、「ポター(注：ピーターラビットの生みの親、イギリスの絵本作家)の本を古典にした力が、物語と絵との完全な合奏にある」「細部がゆたかなので、いくど読んでもあきない。すこしも色あせない」と言及しています<sup>2)</sup>。キャラクターだけでは古典とはなり得なかったでしょうけれども、その愛くるしいさぎと仲間たちが紡ぐ物語と絵と、それに瀬田氏の表現する「小さな小さな宝石」<sup>2)</sup>であるところの、14.6cm×11cmという驚きの小型本の判型すべてが重ね合わさり、融合し、それぞれの力を高め合っているのでしょう。アートのように昇華された美と、美しい言葉に包まれた古典絵本は、子どもと大人の想像力を刺激し、かき立てられるところに魅力があるのだと思います。



### 時代を超える絵本の魅惑

「絵を描かない絵本作家、つまり文士」<sup>3)</sup>と瀬田貞二氏が評するマーガレット・ワイズ・ブラウン文の『おやすみなさい おつきさま』は、アメリカで1947年に出版された絵本ですが、日本でも平成生まれの

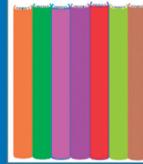
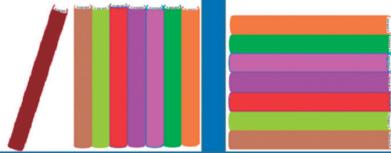
現代の乳幼児の「おやすみ絵本」として愛用されています。

カラーページとモノクロページとが交互に展開され、室内灯の灯りから月明かりへと、静かに時間が移ろいでいく演出です。とても幻想的で穏やかな時間の流れを感じられる絵が描かれています。部屋の家具や小物の描写が、正に細かく鮮明に描かれていて、そこに添えられた文章が子どもたちの探究心をかき立てるものになっています。日本語版は1979年に、かの瀬田貞二氏の訳で出版されましたが、この瀬田氏の訳がストーリーを引き立てているのです。シンプルだけれど、行間ににじみ出るやさしい語りかけは幼い子どもたちを睡眠に誘います。

『おやすみなさい おつきさま』  
マーガレット・ワイズ・ブラウン  
作  
クレメント・ハード 絵  
せたていじ 訳  
(評論社)



2歳～4歳対象のおはなし会で、秋または七夕シーズンに活用しますと、子どもたちは言葉による語りかけに、絵を見て応えてくるのです。「おおきな みどりのおへやのなかに でんわが ひとつ」「あかいふうせんが ひとつ」<sup>4)</sup>で、赤い風船を指さしに来ます。さすがに洋風黒電話は気づけないので、ちょっと教えてあげたりもします。「おやすみ とけいさん」では、一人の子が時計を指さすと、また別のお友だちが「こっちも」と、部屋に2つある時計のもうひとつを指さしに来ます。横長型絵本の見開き2ページにびっしりと描かれたシーンなのですが、色も形も違う時計をもの数秒で発見するのですから、驚いてしまいます。大人の反応も良くて、読んだ後は必



ずお母様から「絵がきれいですね」とか「すてきな本ですね」といった感想を受ける絵本です。ブラウン氏は、本書の画家クレメント・ハード氏をはじめとする優れた画家との共作が100作品以上あり、それを瀬田氏は「専門の絵本ライターとして地位を占めた」<sup>3)</sup>と述べています。

時代を超えても、絵が語る物語と、言葉が語る物語が子どもたちを惹きつけること、それこそが古典絵本になり得る大切な要素だと言えるでしょう。

『ぐりとぐら』  
なかがわりえこ 作  
やまわき ゆりこ 絵  
(福音館書店)



この観点から考えると、50周年を迎えた『ぐりとぐら』はきっと、ピーターラビットと同じく、100年を超えて世界中で愛されるキャラクターになると思います。「物語と絵との完全な合奏」にあり、「細部がゆたかなので、いくど読んでもあきない」ことを子どもたちが証明してくれています。同じお子様が来館のたび、お母様と『ぐりとぐら』を読みあい、また、おはなし会で読んでも笑顔で見入り、ラストシーンでは「車！」と答える姿を見ると、古典絵本と言えば外国絵本に押されているわが国なのですが、引けを取らずに仲間入りできる古典だと堂々と言いきれます。



## 古典絵本と現代の絵本と

福岡市内でトップ2を誇る、頼れる大型書店に行きますと、児童書フロアの絵本コーナーには、新進作家の新しい絵本と、古典絵本とが互角に並んでいます。子どもだけでなく、大人の私もワクワクする大好きな空間です。

おもしろいのは、郊外のショッピングモールに入店しているとある書店では、新刊絵本やここ5~6年

内に出版された絵本よりもロングセラー絵本、古典絵本の点数の方が断然多いことです。子どもたちの目にとまりやすいようか、最近の新しい絵本を面出し展示と平積み展示にして、ロングセラーを背ざしで並べるといいう売り場展開をしています。多様性を増した新進作家の絵本に媚びない姿勢か、絶対的安定感をもつ古典絵本に児童書の売上げを委ねているのか邪な見方もできますが、他の書店では見られないラインナップには、紙媒体である絵本に対しての敬意や、会社の信念がうかがえるところです。

確かに、売れる絵本はテレビなどのメディアで取り上げられ、しばらくもてはやされ、消費され、やがて消えていく構図ができています。しかし、冷静に新しい絵本へ目をやると、良書と呼べる作品はたくさんあるのです。はたこうしろう作『なつのいちにち』は、田舎に住んでいる小学生の夏の一日を描いたもので2004年に発行されました。ページの隅の隅まで余すところなく、夏の風景がリアルに描かれていて、「細部がゆたかなので、いくど読んでもあきない」どころか、読み返す度にボルテージの上がる一冊です。きっと、次世代の古典絵本として残っていくに違いない一冊です。どいかや作「チリとチリ」シリーズを見ても同じことが言えます。

当館選書者のひとりである絵本作家、フリーキュレーターの広松由希子氏は、「何十年も読み継がれてきた古典絵本には、揺るがぬ魅力があります」と言い、それに対比して「今を生きる大人が、今を生きる子どもたちに向けて送り出した新刊絵本」も「手にとって、新しい表現を味わってみてください」、「この新世紀の絵本たちも、読者の心にじっくり根を下ろし、ゆっくりロングセラーになったらいいなと願っています」と記しています<sup>5)</sup>。

良い絵本は、古典、新刊の区別なく味わってほしい、新進作家の良い絵本を後世に残していきましょうというメッセージではないでしょうか。わが家で読み継がれてきた文化の上に、新しい世代のお

父様お母様の感性でまた、新進作家の新しい絵本を積み重ねていければ、家族文化の構築となり、子どもたちに脈々と伝えていけるのではないのでしょうか。私たち今を生きる大人が熟成させるべき絵本はたくさんあるのです。



### 物語と絵の合奏の裏に潜むもの



皆様の待合室に古典絵本が何冊くらいあるでしょうか。「物語と絵とが合奏し、細部ゆたかな」古典絵本の、もうひとつの力を紹介しましょう。その特性ゆえ、子どもにも大人にも安心感や落ち着きを与える作用があり、精神衛生上の安定を図るツールとなり得るのです。大人も懐かしく安心できる古典絵本をチェアサイドに置いて、歯科医療現場でさりげない効果を得ることも絵本に潜む大きな力です。

松谷みよ子作『いないいないばあ』は絵も言葉も、遊び要素にあふれた最高傑作の古典絵本ですので、おすすめできます。松谷みよ子氏と言えば、民話研究を中心とした児童文学界の巨匠なのですが、日本初の赤ちゃん絵本に着手した祖でもあり、この赤ちゃん絵本を1967年に生み出しました。残念なことに、来年迎える『いないいないばあ』生誕50周年を待たずに、松谷氏は、2015年2月に急死されました。しかけタイプの『いないいないばあ』絵本が出版されてからも、松谷版はしかけ絵本に影を潜めることは決してありません。幼児期に入った子どもたちも思わずめくってしまうハデな表情のしかけ絵本に比べると、松谷版は至ってシンプルですが、瀬川康男氏の日本文化の懐かしさを備え持つ素朴な絵が放つ意外性のある画面展開と、繰り返しのリズムは、遊ぶ親子に心地よい安心のうえに成り立った楽しさを与えてくれるのです。繰り返しの中でも、言葉をさりげなく変え、文字の少ない絵本の中に美しい日本語がちりばめられた松谷氏のリズムある表現も、世代を超えて愛され続けられる理由ではないでしょうか。

松谷版『いないいないばあ』は、累計発行部数569万部で、2位の『ぐりとぐら』(472万部)をも圧倒して最も多くの親子に読み継がれてきた古典絵本です<sup>6)</sup>。ランキングベスト10を見ると、『てぶくろ』など8冊が1960年代発表の絵本です。1960年～70年代の子どもたちを楽しませ、冒険に誘ってくれた絵本は今、古典となって平成の子どもたちを楽しませ、ワクワクさせています。「世代を超える」絵本の特性がそのまま再現されていることながら、60年代に発揮した力は何の変わりもなく、色あせすらしない子どもたちを、大人たちを、家族まるごとを惹きつけているのです。歯科医院でも大きな力を発揮してくれることでしょう。



### 文献

- 1) 中川李枝子 作, 大村百合子 絵: ぐりとぐら, 福音館書店, 東京, 1963, p.3.
- 2) 瀬田貞二: 絵本論-瀬田貞二 子どもの本評論集, 福音館書店, 東京, 1985, pp.223-228.
- 3) 同上: pp.360-371.
- 4) マーガレット・ワイズ・ブラウン作, クレメント・ハード 絵, 瀬田貞二 訳: おやすみなさい おつきさま, 評論社, 東京, 1979, p.1.
- 5) 広松由希子: きょうの絵本 あしたの絵本~2001から2012の新刊案内~, 文化出版局, 東京, 2013, pp.182-183.
- 6) 株式会社トーハン: ミリオンぶっく2015年版, トーハン, 東京, 2016.

### 絵本

- 1) 中川李枝子 作, 山脇百合子 絵: ぐりとぐら, 福音館書店, 東京, 1963.
- 2) 竹林亜紀 作, 河本祥子 絵: マフィンおばさんのぱんや, 福音館書店, 東京, 1996.
- 3) ピアトリクス・ポター 作・絵, 石井桃子 訳: ピーターラビットのおはなし, 福音館書店, 東京, 1971.
- 4) はた こうしろう: なつのいちにち, 偕成社, 東京, 2004.
- 5) どい かや: チリとチリリ, アリス館, 東京, 2003.
- 6) 松谷みよ子 文, 瀬川康男 絵: いけないいないばあ, 童心社, 東京, 1967.